

明治の地芝居の一側面

— 『岐阜日日新聞』郡上関連記事を手掛かりに—

One aspect of *Ji-shibai* (Kabuki performed by local people) in Meiji era:
Some facts which newspaper articles about Gujo show

土谷桃子

要旨：

筆者は先に、明治29年（1896）までの『岐阜日日新聞』に掲載された芝居関係の記事を抽出したが、その中から岐阜県郡上地域における地芝居関連の17記事を取り出し、今後の地芝居研究にどのように活用可能か試行した。その結果、地芝居と社会状況との関連、芝居上演に至るまでの手続き、他地域の地芝居団体との交流等のポイントが指摘できた。よりの確な考察のためには、明治30年（1897）以降の新聞記事の調査が急務であると認識した。

1. はじめに

岐阜地域は、土地の人々が演じる地芝居（岐阜地域では「地歌舞伎」と称する場合もある¹⁾）が盛んな地域である²⁾。筆者は先に、『岐阜日日新聞』（明治14年（1881）2月19日創刊）の明治29年（1896）までの紙面から岐阜地域の芝居関連の記事を抽出し、「岐阜地域芝居興行記録一覧稿」（JSPS科研費25370213助成調査成果、2016.3）を作成し、さらに「岐阜の地芝居の足跡 — 『岐阜日日新聞』明治前半期記事の渉猟から—」（『岐阜大学留学生センター紀要2017』2018.7）を著した。同稿では記事の全般的な傾向を示し、興味深い記事をいくつか紹介した。今回の研究ノートでは、蓄積した新聞記事データをどう活用するかを試行する。試行に当たっては、研究のみならず留学生の日本文化体験や地域貢献活動で多くご協力をいただいている岐阜県郡上地域に焦点を当てることにした。

2. 郡上地域の地芝居

2.1 現在の郡上市の地芝居

郡上の芝居の起源として、明和年間（1764～1771）に青山幸道（郡上藩主青山家初代、1725～1779）が江戸歌舞伎を呼び、小野の八幡神社境内に小屋掛けして一般公開したことが指摘されている³⁾。天保11年（1840）に和良遠藤下洞陣屋代官を勤めた池戸甚左衛門が著した『郷中盛衰記』には、「祭り狂言ハは貢間、東野古し両村とも百年余りニも成べし、寛政、享和、文化の頃ハ狂言のなき祭りなし」「祭り狂言の始りハ我等世話致す、寛政時代なり」とある⁴⁾。貢間と東野は、それぞれ現郡上市八幡町入間、同市和良町三庫の範囲内である。寛政（1789～1800）、享和（1801～1803）、文化（1804～1817）には「狂言のなき祭りなし」というほどの芝居熱が、2.2で述べる明治期の郡上にも息づいていたのである。

現在郡上市では、「高雄歌舞伎」と「気良歌舞伎」の2団体が精力的に活動している。高雄歌舞伎は⁵⁾、市島高雄神社（郡上市八幡町市島）の拝殿を舞台としていたもので、同拝殿は延享（1744～1747）以降に成立し、明和5年（1768）に修理されていることから、その頃から拝殿で催されたと考えられている。もともとは「市島歌舞伎」と称され、のちに高雄歌舞伎に改称されたという。明治以降も地芝居は演じられ続け、大正期から昭和初期が全盛であった。高雄神社の拝殿舞台は、天保3年（1832）に再築されたものが現存するが、芝居に用いたのは1985年が最後で、その後は祭りの神事に使われるのみとのことである。現在高雄歌舞伎の公演は、郡上市の口明方小学校体育館で毎年10月に行われている。

気良歌舞伎は、郡上市明宝気良地区の団体で、1988年に途絶えてしまったものが2005年に再興された。高雄歌舞伎の力添えを得ながら、再興に尽力した若者たちが役者として活躍している。毎年9月に明宝コミュニティーセンターで気良白山神社祭礼奉納定期公演が行われている。

歴史ある高雄歌舞伎と若さ溢れる気良歌舞伎の明るく和やかな競演は好ましい。岐阜県は、2020年1月から7月まで「清流の国ぎふ 2020地歌舞伎勢揃い公演」を開催し、毎月岐阜市の清流文化プラザで県内29地芝居団体が次々と芝居を披露する予定であった。高雄歌舞伎と気良歌舞伎の公演は6月7日（日）に予定され、せっかくだから同じ演目をとということで、両者で『忠臣蔵』を選んだ。気良歌舞伎が五段目（鉄砲渡しの場・二つ玉の場）と六段目（与市兵衛内勘平腹切の場）、高雄歌舞伎が七段目（祇園一力茶屋の場）である。郡上としての一体感が感じられる⁶⁾。

郡上の地芝居の特徴は、芝居を仕上げていく過程にもある。地芝居が盛んな東濃地区の中津川市や恵那市では、芝居の指導を専門にする振付師を頼んで稽古を積み、芝居を作り上げる。それに対し郡上では、以前は振付師を外部から呼んでいたが、現在は団体内の経験のあるメンバーが振付をしており、気良歌舞伎の指導には高雄歌舞伎のベテランが協力している。自分たちで指導も技術もつないでいくという文化も、郡上の地芝居の一体感を生み出している要因であろう。

2.2 「岐阜日日新聞」明治20～29年の郡上市における地芝居関連記事

現在2団体が活動している郡上地域の地芝居であるが、明治期の様相を明確に知ることは難しい。本稿では、時事を反映する新聞という媒体から分かることを指摘してみる。当然のことながら、新聞は万能ではなく、新聞がすべての事実を拾っているわけでもないし、誤りがないわけでもない。しかし、手掛かりとしては有用であると考えられる。

調査対象とした『岐阜日日新聞』は明治14年（1881）創刊で、29年（1896）までを調査したところ、地芝居関連の記事は344点あった。そのうち、郡上と明記されている記事は、20年（1887）が初出で、全17記事あった。かなり限られた数と言わざるをえないが、パイロットスタディとして許されたい。各記事と、そこからの推測・考察を矢印（⇒）以下に示した。記事内の振り仮名の取捨選択、空白の挿入は筆者による。

① 明治20年（1887）2月24日

●郡上郡通信 ○素人芝居 目下世間一般に不景気を挽回して好景気を現したる加減にや本郡八幡町近在に於ては素人芝居が流行し 見物人もかなり有るよし

⇒ 郡上の地芝居についての初出記事である。『岐阜日日新聞』には、本記事のように「郡上郡通信」（①②）、「郡上郡八幡通信」（③⑤）や「岐阜通信」、「大垣通信」、「恵那郡通信」等、地域に

特化した記事群が不定期に認められる。その地域の情報を重点的に送信する専門スタッフもしくは有志がいたのだろう。

② 明治24年(1891) 6月23日

●郡上郡通信 ○素人芝居の準備 本年麦作の豊饒なりしと 蚕況の良好なるとに依りて大いに人気立ち 昨年迄の苦しさを忘れて早くも素人芝居などを興行せんと 専ら計画し居る村落もありと聞けり 嘆ずべき至りなり

⇒ ①からも分かるが、景気の良し悪しは娯楽を左右する。麦作については、本記事の直前の郡上郡通信記事に「●麦作 十数年来未だ曾て無き所の豊作にて 三四割方の増収もありしといふ」とあり、稀にみる豊作であったことが分かる。また、明治初期の郡上の養蚕については、「武儀・郡上郡では最も生産価額の高いのがそれぞれ紙、繭・生糸類で、米の生産価額をもしのいでいる。このような特定の特産物が米を凌駕している郡は、美濃には、武儀・郡上両郡以外には存在しない。」⁷⁾と述べられているように、同地の経済活動の中心を担うものであったことが分かる。

養蚕と村芝居舞台の関係については、先行研究に指摘がある。守屋氏は、村芝居の舞台郡の所在が「平野部には少なく、その周辺あるいは山間・海浜といった辺鄙な地帯に集中的に分布しているのが目立つ。」と述べ、さらに「その分布が濃厚なのは、養蚕・製糸を主要な商品生産物とする関東・中部・山陰などの、いわゆる中間地帯に限定される。」と指摘している⁸⁾。養蚕業により現金収入の道筋ができ、かといって裕福な者と貧困な者が断絶するほどの経済格差が生じなかったことが、これらの地域の特色である。経済的な余裕に加えて地芝居の母体となる地域共同体が維持されていたことが、郡上ひいては岐阜地域の地芝居の隆盛をもたらしたと考えられる。

ただ、この記事の最後に「嘆ずべき至りなり」とあるように、基本的に素人芝居は困ったものだという姿勢が同紙には一貫して見られる。

③ 明治24年(1891) 8月13日

●郡上郡八幡町通信(十一日発) ○素人芝居 下洞村近傍にては目下素人芝居の流行甚しく 動もすれば学齡児童も厭ひなく俳優に加ふるに依り 志あるものは大いに痛嘆し居れり
⇒ 現郡上市和良町下洞。②には「蚕況の良好」とあったが、本記事直前には「●繭の収穫 和良地方は昨年に比し多量の増収たるも 何分生糸下値につき随分不景気なり」とある。供給過剰で却って値が下がる状況にありつつも、やはり芝居をせずにはいられない。

④ 明治24年(1891) 8月15日

●村芝居流行 郡上郡宮地村辺にては 例の村芝居熱に浮され 中には教育盛りの子供にして 此の熱に冒されんとするさへありと お歙祭りと一對の馬鹿者 何したら此根絶しが出来るか 嘆々々又た嘆
⇒ 現郡上市和良町宮地。村芝居と対にされている「お歙祭り」であるが、岐阜近隣でその名称に該当するものには2種類あったようである。ひとつは、可児市土田の白髭神社で現在も催されているお歙祭りである⁹⁾。毎年3月11日に行われ、農耕作業の模倣をすることやミニチュアの歙を奉納する点が特色であるという。もうひとつは、伊勢信仰の一種である「お歙様」である。60年に一度伊勢神宮から到来した木製の歙を分霊として祀るもので、江戸年間の郡上への到来は6

回あった¹⁰⁾。本記事の「お欽祭り」は、前者であれば可見に現存するのと同様の祭りが郡上にもあったと考えねばならず、後者であれば明治以降にも祭りが行われていたと考えなければならぬ。いずれが該当するのか、もしくはいずれでもないのかは判然としない。ただ、後者のお欽祭りについては、『続 岐阜県の祭り』に「本来の意義を忘れ全くの馬鹿騒ぎにといえるほどになったのです。／各地で余りの馬鹿騒ぎが続出したので笠松代官はこれを禁止しましたが、郡上藩は黙認したらしく文久までつづいたのです。」(p.241)とあり、本記事の「馬鹿者」という表現と通じるものがある。

⑤ 明治24年(1891) 8月21日

●郡上郡八幡通信(十九日発) ○村芝居にも壮士俳優出来る 東部なる或る会員の壮士三名は 彼の狂人めきたる村芝居の催ほし其の土地に起るや 川上音次郎の喝采を羨みてか俄かに俳優になりたくなり 一番村芝居の壮士俳優として全郡の人気を吸集せんものとの字の眉毛を剃るやら八の字の髻を剃るやらで 何か裁判所公判廷様のものでも演じ 得意の雄弁を揮ひて法律を説き 台詞なく倣草なくして見物に感動を与へる団洲をもアツと言して見せんと 蓋開前から鼻高々として入費の百二三十円も投じて 悉皆準備も出来たところ今度の暴風にて小家も舞台も 刺 離骨敗、手の附られぬ有様なりたれば 三名の壮士村俳優の落胆も嘸かしとお察し申す

⇒ 壮士芝居は、自由民権運動の壮士が思想宣伝を目的として行った演劇で、明治20年代に盛んに行われた。裁判や公判の場面では、演技より演説が重視される側面もあった。川上音二郎(1864～1911)はその主たる役者である。「団洲」は九代目市川團十郎(1838～1903)である。彼は、歌舞伎の荒唐無稽さを排除し史実を重んじ風俗を忠実に再現する、いわゆる「活歴」という演出様式を取ったが、自然さを重視するため台詞も動きも少なめであった。本記事の「台詞なく倣草なくして見物に感動を与へる団洲」はこの点を踏まえている。川上音二郎、団洲という名前が、注釈なしに岐阜の読者に理解されていたことは興味深い。

この芝居を中止に追い込んだ暴風雨については、同日の郡上郡八幡町通信に「●暴風全郡概況 去る十六日の暴風雨は思ひの外被害少なく 今全郡の概況比較を与れば左の如し(略)、飛騨国吉城郡通信に「●十六日の暴風 去る十六日の暴風は当地方にても中々激しく 午後七時二十分より吹起り 雨さへ強く降注ぎて 翌十七日午前六時稍々歇みたるが(略)」とあり、「小家も舞台も刺離骨敗」(刺は嘲の誤りか)であったことが頷ける。

⑥ 明治24年(1891) 11月12日

●村芝居 時節柄少しは謹んで貰ひたしと云つた処が 同域同情の念なき奴輩の耳には入るまじく 所謂縁なき衆生は度しがたけれど 四千万の我同輩中 否な百万の我が県民過半は劇烈なる地震に遭遇し 家財を蕩尽して飢寒を訴へ 父母を喪ふて余震中に白骨を求め 妻子を傷つけて塵烟中手当の行届かざるを歎ずるものある今日に当り 幸ひ己れ震災を免れたればとて 馬鹿へしき田舎芝居に狂奔するとは何事ぞ 聞く郡上郡土京村及び飛騨国益田郡竹原村大字乗政、同郡三郷村大字萩原、同郡下呂村大字小川及び森、同郡中原村大字保井戸及び門和佐に於ては 近々田舎芝居を興行せんとすと 是れ等の奴輩に關つて幾回無情、浮薄、無感覺、無神経等の語を費すも要なき業なれば 只馬鹿の一語を以つて評し去らん

苟りにも之れを口惜しと思はゞ 暫しなりとも田舎芝居を止めよ

⇒ 明治24年(1891)10月28日に美濃・尾張は濃尾大地震に襲われた。マグニチュード8程度と推定され、死者は7千人を超えた。この地震からわずか2週間後であるにも関わらず、記事内の7ヶ所で村芝居が予定されている。記者と同様不謹慎に思うと同時に、芝居にかける熱意に感動に近いものも覚える。記事冒頭の「同域同情」は「異域同情」から作語されたものであろう。郡上郡土京村は、現郡上市和良町土京である。

⑦ 明治24年(1891)12月16日

●馬鹿者 郡上郡大原村福野組の馬鹿者否若者は 県民の不幸を余所に見て村芝居を為し去る十日大入三日間興行したるは余りの仕方に就き 存分筆誅をとの投書ありたり

⇒ 現郡上市美並町大原・同町白山福野。濃尾地震の被害にも関わらず芝居に熱中する若者への批判の投書である。この時期に芝居に興じていたのは郡上の若者だけではなく、前15日には「気楽な人々」という題で、加茂郡久田見村(現加茂郡八百津町久田見)でも一度立ち消えになったはずの芝居を若者たちが興行中だという記事がある。

⑧ 明治27年(1894)8月10日

●芝居興行を遠慮す 郡上郡小那比村と云ふは 同郡中にて比類なき素人芝居の好きな村にして 明治十二年以来八月一日の村社祭典には一年も休まず興行し 其の間年の豊凶を問はず 其筋の許可を論ぜず 無茶に興行して処罰を受けしことも数度あるよしなるが 本年は国家の一大事と聞き何より好きな芝居を十七年目に休み 兵員優待軍資金献納の募集に応じ 其日暮しの赤貧者までが応分の献金を為さんと云ふに至り 若干金を募り得たるよし

⇒ 現郡上市八幡町小那比。「明治十二年以来八月一日の村社祭典には一年も休まず興行」とあるが、岐阜県神社庁公式ホームページ(<http://www.gifu-jinjacho.jp/>)によると、同地区には7社が現存する(熊野、石剣、熊野、八幡、熊野、神明、神明)。このうち、8月1日に祭礼を催していたのは、小那比熊野神社大明神(八幡町小那比字宮ヶ洞)である¹¹⁾。祭礼や芝居を欠かさず行う小那比であるが、「国家の一大事」即ち日清戦争に際しては芝居を休んでいる。同年11月2日には、素人芝居や寄合相撲等の興行が盛んな西濃大野郡でも「目下軍国多事の折柄」であるため興行しないという記事がある。⑥⑦の濃尾地震との対比が興味深い。

⑨ 明治28年(1895)7月30日

●素人芝居 郡上郡にては本年 春 蚕しゅんさんの結果好く 農家にして養蚕の為に得たる利潤少なからざりし故か 農家の景気頗る宜く 同郡和良筋にて小那比村にて二組 差山(ママ)村夕谷組 洲河村 入間村貢間区 和良村宮代、宮地、上澤、下澤等各区の若者は素人芝居を演ぜんとて 既に稽古に取掛りたるが 尚ほ其の他にも若者が稽古を始めんと目論見居るよし

⇒ 地名が細かく示されており、芝居がいかなる地域ごとに行われていたのかを知る手掛かりになる。養蚕の好況が芝居を後押しする。「差山」は「美山」の誤りと考えられ、それぞれは、現郡上市八幡町美山、同八幡町洲河、同八幡町入間、同和良町宮代、同和良町宮地、同和良町沢である。

⑩ 明治28年（1895）8月21日

●素人芝居 西南濃の水害に引替え 東濃地方は概して豊作の模様にて農家の景気宜しく郡上郡にては例の村芝居にて目を突くほどの有様なるよし 即ち近日の分を記せば 和良村大字上澤は十四日より、入間村は十六日より、弓掛村は十八日より 何れも晴天三日間の興行、続ひて宮代村、入間村字大洞、其の他にも順次興行する趣なり

⇒ ⑨に挙げられた地域が再掲されている。新出の弓掛村は、現下呂市金山町弓掛。岐阜県は古来水害に悩まされてきた地域である。『岐阜県史 通史編 近代下』の「洪水略年表」によると¹²⁾、この年7月30日に洪水が発生している。次の⑪も同じ水害である。

⑪ 明治28年（1895）8月24日

●素人芝居 西濃では水入がしたとか堤防^{つゝみ}が切れたとか または溜り水が退かずして稲が腐つたと云つて泣て居り 征台軍は百二十度以上の暑熱を侵して忠汗を絞り 土民の頑迷に苦しみ居る折柄 狂気染みた真似をして素人芝居に有頂天となるは誉られぬ事共なり 斯る用費があらば 恤兵の資に供する事こそよけれ 此の誉られぬ連中は東濃に地方に多くありて郡上郡にても和良村字上澤は去る十四日より三日 入間村は同十七日より三日 和良村宮代は同二十日より三日 八幡町は同二十日より六日間 若い衆連が素人芝居を興行し また稽古中なるは 同郡小那比村作道 洲河村 和良村田平外数ヶ所なりとイヤハヤ

⇒ ⑩と同じく水害への言及がある。「征台軍」は、日清戦争後の台湾平定のために派遣された近衛師団のことである（師団長北白川宮能久親王）。これらの国難にも関わらず、既出の各地に加え、現郡上市八幡町小那比作道、和田町三庫田平でも芝居の準備が進められている。

⑫ 明治28年（1895）9月11日

●若い衆の落胆 二百十日も二百二十日の厄日も無難に過ぎて 米の出来は不十分ながら本年も先づ八九分の作 彼岸過ぎに水田の跡口を切り落し稲刈り迄は農家暫らく隙など云ふ所から 東濃から北濃飛騨地方へ掛けて 何所の村の若い衆も素人芝居を企て 二三人寄り集ると芝居嘶し許り オイ吉イ 何ふじやろうそろへ芝居の時候に成つて来たのう 己去去年の祭り狂言に忠臣蔵の狸の角兵衛と 扇屋熊谷の姉輪平次 見たよふな馬鹿な役を貰つて味噌を付けたが 神殿の勘太の野郎は早野寛平に三代記の三浦を演りやアがつて 村中の阿魔つちヨを撫で廻はしやアがつたのが癪に障るが 手前はまだお軽に時姫なんと云ふ女形で当てたが 今年が一番己^{おれら}等目立て、良い役を取つて遣ろうじや無いか 又鐵公が下手な癖に芝居か ウン去年よりは勉強して見せるは 虎に熊 どうふじや常設委員様の所へ行つて願つて見よふじや無いか 皆な一所^{いつしよ}に來いと 打ち連れ立つて常設委員とか区長とか総代とか云ふ家へ行き 頼んで来ては稽古に掛り大根の陳列会を開くが 中に郡上郡地方も度々本紙に掲ぐるが如く 各村至る所で村芝居の相談が煮へ立ち 彼方^{あつち}でも此方^{こつち}でも芝居へと八釜しく云ふにぞ 和良村大字澤の若連中も隣り村が演つて澤が演らぬと云ふは面目無いと 同じく協議を纏めて武儀郡関町より師匠を雇ひ來たり 稽古に掛ると云ふ段になりて同郡長より各村長へ向つて注意したる其の儘を村長が若者へ通じ 懇々説諭しけるに若者連一同落胆したが 郡長様や村長様の御説諭に背く事は出来んとて 一時見合せる事にして師匠を帰したりと 此所若い衆大出来へ

⇒ この記事からは演目と実施に係る関係者の一片を知ることができる。演目については、記事内に記された役名から、『仮名手本忠臣蔵』（狸の角兵衛：六段目に登場する獵師・可笑しみのある役、早野寛平：塩治判官近臣、お軽：勘平の恋人）、『扇屋熊谷（源平魁躑躅二段目切）』（姉輪平治：熊谷直実に投げられる道化役）、『鎌倉三代記』（三浦（三浦之助義村）：京方の武将、時姫：三浦の恋人・北条時政の娘）の三演目が判明する。若者たちが事前に話を通す必要のある者には常設委員・区長・総代があり、若者に苦言を呈するのは郡長・村長である。郡長と村長からの注意によって断念はしたが、武儀郡関町（現岐阜県関市）から師匠を呼んでいることは注目される。同日紙面の「村芝居」という別記事には、益田郡中原村和佐区（現下呂市中原区和佐）は村芝居に「中村秀蔵とか云ふ師匠を日当一圓五十銭にて頼み来り」とあり、師匠を他所から呼ぶのは珍しいことではなかったと推測される。

⑬ 明治28年（1895）9月12日

●郡上郡の芝居一東 郡上郡大間見村にては 去六日より壮士芝居興行、洲河村にては八日より素人芝居興行、白山村上荊安組は目下稽古中、西乙原村は旧盆に興行する筈なりしも赤痢病流行の為め一時中止

⇒ 現郡上市大和町大間見、同八幡町洲河、同美並町白山、同八幡町西乙原。記事中の赤痢は、明治20年代に大流行する。『岐阜県史 通史編 近代下』の「赤痢大流行」によると¹³⁾、岐阜県は明治26年（1893）、全国的な赤痢の爆発的発生・流行に巻き込まれ、4,117名もの患者が発生した。27・28年は小康状態を保ったが、29年に再度大発生し患者は5,502名に達した。これらの数値は岐阜県総人口の4～5%に当たるといふ。しかし⑭以下にあるように、赤痢の流行にも関わらず芝居に熱を上げる人々も多かったようである。

⑭ 明治28年（1895）9月18日

●素人芝居 東濃名物村芝居は昨今盛んに催ほし至る所演つて居るが 中にも土岐、郡上、等は最も甚しき由 其の他可児、恵那、武儀、の各郡及び飛騨地方も同様にて 其の一二を挙げれば（筆者：郡上以外略）

○郡上郡和良筋の 各村は一村に二組乃至三組宛稽古に取り掛り居れり

⇒ 地芝居が最も盛んであると目される東濃とともに郡上が挙がっている。

⑮ 明治28年（1895）9月26日

●振り付けは巡査 郡上郡とのみで村名は聞き漏らしたが 某村内の若者連が素人芝居を興行すると云ふ相談が纏まり 振り付を頼んで稽古に取り掛つた処が 其の村の近傍に駐在する巡査某が其の稽古を見に来合せ アノ振りは間違つて居るとか 此のタテは使ひ場が違ふとか小言を並らべ種々講釈をするに 振付師も兜を脱ぎ お役人様のお玄人には振付感心（ママ）な仕ります 却々以て未熟な拙者輩の及ぶ所では御座いません 斯ふ申せば甚だ失礼ながら お役人様には余程お芝居が御執心と見へます 私し風情の為す事は御眼だるく御座いませうが 何分とも行届かぬ所は御教導に預りたふ 偏へに願ひ上奉り升と降参したので 巡査殿得意になり イヤ拙者も言はるゝ通り芝居は大好きで振付もやつた事があると云へば道理で凡人ならぬ眼力で急所をお突き遊ばさるゝと感心致（ママ）い御座ります 何卒此の後も

御巡回の御暇には是非とも御立寄りに成りまして 御補助を願ひますと頼んだのを村の者が
聞いて居て 師匠に雇つた人より巡査の方がエライげな 同じ芝居を演るならば少しでも良い
師匠に習つた方が徳じや 皆々巡査の所へ頼みにに行け 合点だと十数名打ち連れて駐在所へ
行き 芝居の振付方を嘆願に及ぶと 巡査も喜んで 然らば拙者が振付顧問に成つて教授致
す御座ろうと 快よく引受けたので若者の喜び一方ならず 夫より毎日暇さへあれば件ん
の巡査が出掛けて芝居を教へ 今では頼んで来た振付師は不要に成つた様な始末で 丸で巡
査一人で背負つて立つ有様なりと 岐阜県には多能な巡査が抱へてあるとて其の近辺の者は
大喜び 倅其の巡査は夜這ひ巡査と云へば直ぐ分かる人物なりとかや

⇒ 前掲⑫と同じく師匠(振付師)を雇っているが、その振付師より地元の巡査のほうが熱心に
指導をするという笑い話である。しかし、その所業を評価しているわけではなく、「夜這ひ巡査」
だというオチがある。

⑩ 明治28年(1895)10月31日

●村芝居流行 郡上郡の各村にては過般来村芝居が非常に流行し 所々にて興行せしが 尚
其の後も追々催ほす処ありて 同和良村のみにても目下、土京、下洞、方須、下澤、法師丸
の五ヶ所にて稽古を為し居ると云へり

⇒ 現郡上市和良町各地(土京・下洞・方須・沢・法師丸)。和良地域には、戸隠神社の拝殿舞台
が上沢と宮地に現存している。いずれもかつては回り舞台だったようで、前者には明治16年
(1883)、後者には21年(1888)の棟札がある¹⁴⁾。地芝居が盛んであったことがうかがえる。

⑪ 明治29年(1896)8月26日

●村落芝居 武儀郡菅田村朝日座にては 去る二十三日より昨日まで三日間 郡上郡小那比
村の若者連地狂言一座を招き芝居を興行せしに 素人芝居にしては能く出来るとて日々大入
りを占めたるよし

⇒ 現郡上市八幡町小那比の若者たちが、他の地域(現下呂市金山町菅田笹洞・桐洞)に乞われ
て赴き、芝居を披露していたことが分かる。地域を超えた素人芝居の行き来はどの程度行われて
いたのだろうか。この記事の武儀郡の朝日座については、幻燈会と学術演説が行われた(明治22
年9月15日)、助岡屋岡助の芝居が不評だった(27年2月2日)という記事もある。演説会、芝居、
幻燈会とさまざまな目的で同座は用いられていたのである。横道に逸れるが、「朝日座」は郡上郡
八幡にもあり、明治24年9月6日、25年1月17日、26年1月10日、27年12月11日、28年4月17日
に記事が認められる¹⁵⁾。

3. 今後の研究に向けて

以上の17記事から以下のポイントが指摘できる。

1) 経済及び社会状況との関連

娯楽は平和で余裕があってこそのものである。好景気は芝居を後押しし(①②⑨)、災害があれば
自重が望ましいとされる(濃尾地震⑥⑦、水害⑩⑪、赤痢流行⑬)。国家の一大事である戦争時
も同様である(⑧⑩)。災害や国難にも関わらず芝居をやろうとする若者らは批判される。その

背後には、芝居は怪しからぬものであるという通念または建前があり、それは子どもの芝居参加への批判にも表れている(③④)。

2) 他の祭りとの関連

地芝居はもともと神事の余興であった。他の祭りとは併記されている記事に、そのことを改めて感じた(④⑧)。地芝居と地域との関係を考えるうえで、芝居以外にも視野を広げる必要があるであろう。

3) 演目

地芝居の演目は、誰でも知っている大定番演目と、その地域ならではの独特な演目の2種類があると推測している。⑫の『仮名手本忠臣蔵』、『扇屋熊谷』、『鎌倉三代記』は、前者に相当する。

4) 実施までの手続き

前項と同様、⑫が示唆する。記事内の常設委員、区長、総代、郡長、村長がそれぞれどのような役割だったのかは不明であるが、この他に警察に対する手続きもあったはずである。演目についての許可も必要だったかもしれない、3)と4)は合わせて検討する必要があるかもしれない。

5) 振付師の呼び寄せ

現在の高雄歌舞伎や気良歌舞伎は外部から振付師を呼ばないが、東濃では振付師を依頼する。⑫⑮から、そのような例が明治(もしくはそれ以前)には郡上にもあったことが分かる。どのような人物を呼んでいたのか、謝礼はどうしていたのか。

6) 地域を越えた地芝居の交流

素人による芝居でありながら、他の地域まで出かけて公演をしていたのは面白い(⑰)。2)に言及したように、もともと地芝居は神事の余興で、その地域で、いわば内輪で楽しむものだったはずである。それが独立して他地域にまで遠征するようになったというのは、純粋な娯楽としての色合いが強まっていたことを示す。地芝居団体がどのように行き来し、交流していたのだろうか。今回調査対象とした時期より後のことと思われるが、それぞれの地域の若連中は地芝居のための舎名を持っており、地芝居の楽屋の入口に「○○舎若連中より」と書かれた他村からの贈物ののれんがかけられたという¹⁶⁾。いつ頃からこのような慣例になったのだろうか。地域間の移動・交流という点で、5)の振付師の呼び寄せと通じるものがある。これらは探索が困難であろうが、岐阜という限られた地域をターゲットにすれば、断片的な事象は明らかにできるかもしれない。

4. おわりに

今回は17記事という非常に限られた素材を元に、今後の研究のきっかけを検討した。地芝居全体について以前から筆者が感じていたこと(社会との関わりや演目の選び方)については、よりその感を強くした。また、地芝居団体の地域間の移動は興味深い。地域に根付いた独自の文化である芝居が、他の地域に出かけても演じられる普遍性も有するようになっているのである。さらなる解明のためには、明治30年(1897)以降の『岐阜日日新聞』からの芝居関連記事抽出作業をしなければならないと痛感している。これが、最も具体的かつ必要性の高い今後の目標である。

〈追記〉

本研究ノート脱稿後、『歌舞伎 研究と批評』65号(2020.7)で「特集—〈素人芝居〉とその周辺」が編まれた。岐阜地域への言及も多く、示唆に富む特集であったことを付記する。

注

- 1 本稿では、基本的に「地芝居」を用いるが、引用記事中の素人芝居・村芝居等の用語も適宜用いる。
- 2 拙稿「岐阜の地芝居の足跡 —『岐阜日日新聞』明治前半期記事の渉獵から—」(『岐阜大学留学生センター紀要2017』)参照。
- 3 太田成和『郡上八幡町史 上巻』八幡町役場、1955、p.349
- 4 『郷中盛衰記』の翻刻は、和良村教育委員会『和良村史 下巻』(岐阜県和良村、2002、pp.862~870)にあり。同書より引用。
- 5 高雄歌舞伎および市島の高雄神社拝殿舞台については、「高雄歌舞伎よもやま話」(郡上八幡まちづくり誌編集委員会『ふるさと創生読本 郡上八幡の本』はる書房、1992、pp.186~191)、「高雄歌舞伎」(『岐阜県の地芝居ガイドブック』岐阜女子大学地域文化研究所、2009、pp.54~55)、「市島高雄神社大神楽」(寺田敬蔵『続 郡上の祭り』郡上史談会、1978、pp.155~161)、高雄神社氏子総代『高雄神社と市島』(高雄神社氏子総代、1978)等を参照した。また、郡上市歴史資料館館長細川竜弥氏へのインタビューと、同氏提供の資料、同資料館所蔵資料からも種々の教示を得た。
- 6 残念ながら、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、3月以降の「清流の国ぎふ 2020地歌舞伎勢揃い公演」は延期となり、高雄・気良の競演も本稿執筆時までには観ることができなかった。中止ではなく延期であることに期待を寄せ、2021年以降に実現することを切望している。
- 7 岐阜県『岐阜県史 通史編 近代中』大衆書房、1970、p.49
- 8 守屋毅『村芝居 近世文化史の裾野から』平凡社、1988、pp.38~40
- 9 可児のお鞆祭りについては、『可児市史 第4巻 民族編』(可児市、2007)の「第二節 特徴ある祭礼 — 土田白髭神社のお鞆祭り」(pp.371~375)に詳しい。
- 10 このお鞆祭りについては、寺田敬蔵『続 郡上の祭り』(郡上史談会、1978)の「お鞆祭り」(pp.240~306)に詳しい。
- 11 寺田敬蔵『続 郡上の祭り』(郡上史談会、1978)の「小那比熊野神社大神楽」(pp.52~56)による。郡上市歴史資料館での聞き取りによると、同神社の神楽は2005年まで行われていたそうである。
- 12 岐阜県『岐阜県史 通史編 近代下』大衆書房、1972、pp.1074~1077
- 13 岐阜県『岐阜県史 通史編 近代下』大衆書房、1972、pp.1163~1167
- 14 麓和善他『岐阜県近代和風建築総合調査報告書』岐阜県教育委員会、2016、pp.353~358
- 15 太田成和『郡上八幡町史 上巻』(八幡町役場、1960)の「郡上の芝居の起源」に、「明治三〇年ごろ本町の裏側の旧牢屋の跡のあたりに初めて芝居小屋が立ち、その後殿町(土木出張所付近)に朝日座が建てられるに至った。」とあるが、本記事の「朝日座」が同じ小屋であれば、創建年の範囲を狭めることができる。

- 16 吉岡勲監修・郡上史談会『岐阜県の歴史シリーズ (5) 図説郡上の歴史』郷土出版社、1986、
p.150

参考文献

- 有代和夫『写真でみる郡上百年』郷土出版会 1984
太田成和『郡上八幡町史 上巻』八幡町役場、1960
太田成和『郡上八幡町史 下巻』八幡町役場、1961
可見市『可見市史 第4巻 民族編』可見市 2007
蒲池卓巳「地芝居あれこれ (31) 高雄歌舞伎と気良歌舞伎」『全日本郷土芸能会 会報』93号 2018.
10
岐阜県『岐阜県史 通史編 近代中』大衆書房 1970
岐阜県『岐阜県史 通史編 近代下』大衆書房 1972
岐阜県文化財保護協会『岐阜県の文化財』大衆書房 1988
岐阜女子大学地域文化研究所『岐阜県の地芝居ガイドブック』2009
郡上八幡まちづくり誌編集委員会『ふるさと創生読本 郡上八幡の本』はる書房 1992
高雄神社氏子総代『高雄神社と市島』高雄神社氏子総代 1978
土谷桃子『岐阜地域芝居興行記録一覧稿 (明治初年～)』JSPS 科研費25370213助成調査成果 2016.
3
土谷桃子「岐阜の地芝居の足跡 —『岐阜日日新聞』明治前半期記事の渉獵から—」『岐阜大学留
学生センター紀要2017』2018
寺田敬蔵『郡上の祭り』郡上史談会 1977
寺田敬蔵『続 郡上の祭り』郡上史談会 1978
麓和善他『岐阜県近代和風建築総合調査報告書』岐阜県教育委員会 2016
守屋毅『村芝居 近世文化史の裾野から』平凡社 1988
吉岡勲監修・郡上史談会『岐阜県の歴史シリーズ (5) 図説郡上の歴史』郷土出版社 1986
和良村教育委員会『和良村史 下巻』岐阜県和良村、2002

『「全国の地芝居 (地歌舞伎)」調査報告書』平成27年度 文化庁「全国地芝居 (地歌舞伎) の実
態等データ作成業務」文化庁文化財部伝統文化課 2016 (PDF版: https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/jishibai_jikabuki/pdf/h27_chosahokokusho.pdf)

インターネットサイト

- 岐阜県神社庁公式ホームページ <http://www.gifu-jinjacho.jp/> (20200622確認)
岐阜地歌舞伎ツーリズムネットワーク事務局「地歌舞伎」<https://www.jikabuki.net/> (20200622確
認)